

# もろびとよりの日本への旅

人類学者

川田順造

●第一部 ● 江戸東京の下町が「記憶」するもの

## 「荒ぶる自然」と「みやびな自然」再考

### 『古今和歌集』の世界

芭蕉の感性が、「みやびな自然」によりは、「荒ぶる自然」により強い親和力をもっていたのではないかと前回到述べた。芭蕉の俳諧の対極に位置づけられるか知れないのが、思い切り機知をはたらかせて「みやびな自然」を歌った、というよりは創出した、『古今和歌集』に収められた歌の数々ではないだろうか。

周知のように、『古今和歌集』は芭蕉の時代のおよそ八百年前、醍醐天皇の勅命によって編まれ、平安時

代の延喜五年（九〇五）に成立、同年四月十八日に醍醐天皇に奏上されたとされる。「みや」つまり宮廷に仕える歌人たちが、漢文との二重言語の生活の中から、やまとことばの歌を、だが万葉調の直截、素朴な表現によってではなく、遊び心を盛り込み技巧を尽くして作った「みやび」な歌たちが、初めて『古今和歌集』に結集したのである。

六歌仙に代表される前期の歌たちの、巧妙な掛詞かけこじで人工的に「自然」に仮託した「みやび心」の達成。例は枚挙にいとまないが、小野小町の有名な「花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせし

まに」の、当時はすでに「梅」でなく「桜」であった  
「花」の、植物としての桜とわが身との重ね合わせ、  
「古る」と「降る」、「眺め」と「長雨」の見事な掛詞。

やはり六歌仙の一人に数えられる僧正遍昭が、寵遇  
を受けた仁明天皇の崩御により三十六歳で出家する前  
良岑宗貞の名で詠んだなまめかしい歌「花の色は霞  
にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風」も、宗  
貞が思いを寄せる乙女にあてた恋の歌を託した使者の  
首尾を、慮おもんはかって詠んだものであるというから、花、  
霞、香、山風などの「自然」は、そうした想いを仮託  
する素材にすぎなかったのであろう。「小倉百人一首」  
でも有名な、やはり宗貞の頃の歌、「天つかぜ雲の通  
ひ路ふきとちよをとめの姿しはしとどめむ」も、五節  
舞姫まひひめを天女に見立てた上で、風に呼びかけて空の雲を  
詠んでいるのだから、その技巧の入りくみ方は、ひと  
通りのものではない。

『万葉集』にも、大伴家持の「海ゆかば……」に典型  
を見るような機ゲレケンハイツケンデヒト会ヒト詩もあるが、『古今和歌集』  
では、まさに頻出する。

明治になって、正岡子規以来、『古今和歌集』のこ  
うした「みやびな」技巧がとかく疎うとまれる風潮も生ま

れたが、自然も人間のみやび心を映す対象として思い  
描かれているという点で、日本人の自然観の一方の極  
致を示していると言えるだろう。

### 絵画でも、唐風の模倣から大和風へ、そして……

興味深いのは、「自然」を素材にした絵画の領域で  
も、この時代は唐の山水画そのままの模倣から、唐朝  
画の様式を日本に移して日本の風景の情趣を描く、い  
わゆる大和絵の萌芽期にあたっていることだ。その画  
題として、いわゆる名所を描いた名所絵が流行する。

明石浦、須磨の浦、天の橋立、竜田川、富士山、等々。

当時の作品は遺っていないが、それぞれの名所を詠  
んだ和歌に合わせ、特定の季節に対応してイメージさ  
れたものであったらしい。「例えば春日野は春の若菜  
摘み、竜田川は秋の紅葉といったように、特定の季節  
に結びついた、その表象としての役割をもっていた。

実際の景観に似ているかどうかということにはあまり  
関心が払われなかったようである」(サントリー美術館一  
九九〇年企画展図録『画家と旅 描かれた自然Ⅱ』所収の辻惟  
雄の氏の解説「真景」から「写真」へ)。